

# 顕彰会便り

NO.2

昭和60年(1985)8月30日  
編集・発行  
津田左右吉博士顕彰会  
広報委員会  
(TEL 0574-25-2714)

## 語りつごう 郷土の偉人

十年一昔ということわざがあります。辞典を見ると「世の中移り変わりがはげしいので十年たてば、まるで以前の面影が失われ昔と今ほとの違いになる」と出ています。十年どころか今や「五年一昔」「三年一昔」「二年一昔」特

に最近は、「二年一昔」と言ってもよく、昨日見た田んぼが今日はアパート群のそばえたつ団地に変わったりする時代になりました。こんな時代ですから、今日の出来事や今日やかましく言われた事でも早や明日は忘れられて

まっています。ましてや昔から伝わっている話、昔の暮らし、昔の人物、昔の出来事、風景などはとくに忘れられてしまっています。昭和三五年(一九六〇年)二月美濃加茂市初の名誉市民に津田左右吉博士が推挙されました。それから二昔半が過ぎました。(五年一昔とするならば五昔、三年一昔とするならば八昔一寸たちました。)

現在名誉市民といっても知っている人が多くあるでしょうか？ 名誉市民津田博士と云って話しても聞いた時はアーそうかと思うが、つい忘れられてしまっています。



早大にある博士の肖像



この様な私達郷土の人物、出来事、伝説等はいついつまでも忘れることなく記録に残し子から孫へとみんな語りつがねばならないと思います。目に見えない形に無い大切なこれは財産です。大事に大事に残したいものです。

職名	氏名	備考
名誉会長	高橋	考光友本
会長	尾関公見	元下米田小学校長
副会長	土屋保	市議会議員
〃	杉山庄八	自治会長
監事	間宮瑞夫	学識経験者
〃	小栗兼光	自治会長副会長
会計	山田正英	地元代表
理事	鈴木義巳	市議会議員
〃	三宅稔	〃
〃	渡辺平義	自治会長副会長
〃	佐曾利義	下米田小学校長
〃	西山喜洋	学識経験者
〃	打田徳七	健寿会代表
〃	長谷川たき	婦人会長
〃	座馬あつ子	婦人会副会長
〃	佐合節子	〃
〃	田口修生	青年団長
〃	渡辺勝	郷土歴史学級代表
〃	諸橋彩子	読書サークル代表
〃	間宮良子	〃

現在、津田博士顕彰会の会員数は、下米田町を中心に約500名。博士の業績をたたえ、後世へ伝えようとする各種記念事業をはじめいろいろな活動をしていきます。私たちはひとりでも多くのみなさんに理解をいた

だいて、現在の輪をもっと大きくしたいと考えています。詳細及び申し込みは、下米田公民館内・津田左右吉博士顕彰会

（美濃加茂市下米田町則光・電話二五二七二一四）まで。なお入会金は五百円です。

### 新会員募集中

# 生誕の地記念碑が たてられて

私たち小学生は、津田博士を直接知りません。でもいろいろな機会に立派な博士のお話は、聞いています。特に卒業生である、六年生は、毎年尾関先生を招き、博士のお話を聞く会を持っています。

博士がこの東栃井で生まれ下米田小学校の前身である文明義校で学ばれた事は、その後輩として大変名誉な事です。

文明義校卒業後向学心に燃え、遊学され東京専門学校でも、その成績は、抜群であった事、本当に素晴らしい事です。



しい事です。その後、母校である早稲田大学で教えるかたわら、研究された「古事記及び日本書紀の研究」論文に対していろいろな批判や発売禁止等の強制そちを受けたにもかかわらず、博士は、断固として

て自せつを曲げなかつた信念の人でした。ところがその研究が終戦後認められ、文化勲章を受けられた事は、本当によかつたと思います。

その博士が私たち美濃加茂市の名誉市民の第一号になられたのも当然だと思

います。今、博士の生誕のこの地に、博士の遺徳をしのび記念碑が建てられるのは、本当にうれしい事です。私たち小学生も、先輩であり、名誉市民である博士を見習って、これからも一生懸命頑張り、郷土のため、社会のために役立つ人間になりたいと思います。

昭和五十九年十二月四日

生誕の地標柱除幕式に

際して

下米田小学校児童代表

日置 潮



## 津田賞をもらって

深渡 渡辺 文代

私が小学校を卒業した時の記念にいただいた物の中に、津田賞がありました。それは文鎮でしたが、それには津田博士の学問に対する熱意がこめられているんだなあと、とてもうれしい気持ちになりました。

津田博士についての話は、いろんな方から聞いたり、スライドなどを見せていただいたりして知っています。例えば、少年時代からとても学問好きでよく本を読んでいたと

いうことや、そのために机や本などの物をとくに大切にしていたということ。けれど、私たちはよく机に落書きをしたり、傷をつけた

りしています。でも、津田博士の事を思い浮かべるともうこんな事はできないと思います。



津田賞の文鎮

だから、津田博士を見習っていきたいと思います。

### 昭和59年度事業報告 (59.2~60.3)

月日	事業名	付記
59.2.11	設立総会 記念講演「津田史学を考へる」	於下米田公民館 講師・渡辺孝先生
	記念誌発刊「郷土の光津田左右吉博士」	
	津田博士遺品展 津田博士写真展	於下米田公民館
2.29	役員会開催	組織運営と今後の事業について 専門委員会設置 今後の事業計画について
3.8	理事会開催	
5.31	専門委員会及び理事会	今後の事業計画について 具体的活動内容について
6.20	総務委員、各専門委員会委員長合同会議	
7.21	専門委員会	
8.7	総務委員、各専門委員会委員長合同会議	
8.22		
9.10	顕彰会便り(1号)発行	
11.14	総務委員、各専門委員会委員長合同会議	生誕の地標柱除幕式について 於東栃井現地
12.4	生誕の地標柱除幕式挙	
60.2.14	総務委員、各専門委員長自治会長代表打合せ	今後のあり方について

# 博士の墓参と早稲田大学訪問記

会長 尾 関 公 見

昨年十月八日、顕彰会を代表して、土屋副会長、三品事務局長、可児書記と私の四人で上京しました。

## 一、栗田直躬先生宅訪問

元早稲田大学教授で、博士高弟の第一人者であり、さきの名譽市民推戴式にも来市された栗田先生は、練馬区の武蔵野音楽大学の東北二百米程の閑静な住宅街にお住いでした。博士の数多くの著述の校正を担当し、晩年には博士の影の如くに付き添われ、又全集の編集という大事業も、先生の御骨折りで大成されたといわれるお方であり、博士も殊の外信頼された先生であります。

博士逝去後の津田家の御様子や、早大との関係など詳しく承りました。

御手許に保管されている、博士の原稿、色紙、掛軸、その他数々の貴重な遺品について説明していただき、カメラにも撮らせていただきました。殊に床の間の「是心是佛」

の軸を拝見し、その雄渾な筆勢に一驚すると共に、「佛教もキリスト教も一つの宗派です。」と喝破され、あらゆる宗派の教義に徹底されながら、心酔することなく、無宗教であることと見なされている博士に、こうした語句の揮毫があることは即席では理解出来ず、又記名も落款もない所に博士の御性格などもうかがわれて、感歎久しうして座を立つことが出来ませんでした。



博士の書

## 二、平林寺の墓域

栗田先生の御高配により、お弟子二名の方の車で平林寺に向かいました。

野火山の用水で名高い同寺は境内三百万坪といわれる広大な土地に、大木のうっそうと繁る古めかしい禅刹であります。

伊深正眼寺の高僧・小南惟

精老師の高弟の三羽鳥と呼ばれた白水敬山老師の現住の時格別の御配慮により、この境内の一隅に墓域を定められた由……。

栗田先生の御案内により、迷うことなく辿り着いた時はもう秋も日暮近く、あたりも薄暗く感ずる時刻になっていました。

墓は博士の肖像を作られた彫塑の大家、笹村草家人氏の構想により「線香くさいものにしたくない」とのお考えから築かれたもので、石材の加工には一切機械を使わず手打であり、碑に用いる巨材は、真

鶴から信州の穂高に送られ、磯山美術館の関係者の手で鑿打ちが進められたとのこと。

敷きつめられた白石、砂等も国内各地の名石をとり寄せ、シナ趣味の入らぬ日本の風趣を重んじ、落着いた雰囲気がかもすよう工夫され、墓碑の周囲はびっしり矢竹で囲まれ正面以外の三方からは垣間見ることの出来ないゆかしい構えであり、花の咲く木も博士の命日が十二月であることか

ら、寒椿一本だけという風に、一木一石皆それぞれに意味を持つ植込みであります。

墓碑は写真で見ると、長方形で寄せ棟の格好であり、蓋部と碑身とに分かれ、身部は舟底型に削られ、その中に博士の臍の緒、歯、髪の毛等が納められている。

ちなみに碑面の「無」と入口の伊予石に刻まれた「津田」の文字は岳父高橋昌良氏の筆跡から取ったものであります。栗田先生はいろ／＼お話し下さった最後に、「この墓は立派な芸術品です」と結ばれました。

## 三、早稲田大学訪問

### (1) 図書館特別資料室

翌九日、栗田先生の御案内で、先づ図書館の特別資料室を訪れ、博士の日記、所蔵の絵画を閲覧させていただきました。

博士の日記は全集発刊によって初めて世に公開されたもので、明治二十九年(三三才)から四十五年(三九才)までの



平林寺の墓

長期にわたり、実に丹念に記載され、和野紙に毛筆で認めであり、その根気と、才気煥発には驚異というか、感歎の外ありません。

一々目を通す余裕がなく残念ですが、この日記には「浪花の花」「浮雲去来」「八重葎」排主であり、あまりにも直情径部別に御自身の手による假とじされておるのを更に保管の為優美な枠に納められています。

お若い頃の日記によれば他の追隨を許さぬ明晰な頭腦の持主であり、あまりにも直情径行な御性格の博士であっただけに、あらゆる生活面や対外的に苦惱、煩悶の深刻な時期であったようです。こうした悩みの中にも次から次へと著

名な書籍を読破されたこと、又心境を多くの歌に託して表現された事など実に驚きの外ありません。

絵画は博士と親交のあった洋画家曾宮一念氏の風景画で博士も常に好んで眺められたものであります。

○大学本部の大学史編集所  
ここでは既に参考資料が大きな机上に一ぱい並べてお待ち下った御好意に感想しつつ順次説明をきき撮影させていだきました。

出版法違反の廉で博士が受難された当時の参考資料が特に多く、博士が大変な時間を割いて記述された膨大な上申書は流石に読むものを感じさせる貴重な資料であります。その他博士についての記録のほか参考資料が洩れなく集められ当市から贈られた表彰

状もありました。

他所に保管されている肖像もわざ／＼御運び下さるなど大変な御骨折りに感謝し次に回りました。

### Ⅵ 文学部図書館

博士の逝去後蔵書は全部早大に寄贈され、津田文庫として保管されているのを拝見しました。

幼時から読破された、和漢洋の万卷の書籍が、ボタン一つで前後に移動する大きな書架に整然と保管されています。一般には公開されていませんが殊に学究の方たちに利用されているようです。

以上や、冗長に流れましたが、何れの場所においても、在りし日の博士の面影を偲ぶことが出来、超人的な学績に驚嘆せずにおられませんでした。



津田博士の書架

郷土の光津田博士が年を経て益々輝きを増していることを痛感し、一層と敬仰の念を深めた次第です。



## 子どもと

### 共に

東橋井 酒向 英子

西の空があかね色に染まるころ、降るように鳴いていた蟬の声がひとときわかんないひぐらしにかわると、思い思いに遊んでいた子ども達は、あみとかごを肩にお宮の森に

あしたを約束する。杉の木に囲まれた拝殿の柱に「この天満神社は菅原公が御奉りしてあり学問の神社として皆さんに崇拝され……津田文学博士も幼少のころ朝夕参拝され……」とある。生家より二百メートルほどの道のりは、子どもにとつて、けつこう遠く感じられたであろう。

うけれど、朝に夕に通われた博士の小さな姿を、今思い浮かべる。生家では、母上が村の娘たちに裁縫を教えられ、士族の家らしく座敷に立てられた唐紙には、墨鮮やかに、漢書の書風がいかにも学問を志した人の生家を思い起こす。

又、庭には、四季折々にかわる木々の中に山茶花の鮮やかなピンクの花が人目を引く。その枝振りには、木登りに手頃な枝を張り、長い年月子どもの足を支えピカピカと光っている。秋には又柿の木が年輪を刻みながら子どもの声を待っている。

時は流れ、古きものが忘れられつつある今、子どもの中に学ぶことを身近に教え、誇りを感じながら、津田博士の碑に子どもと共に花を添える。

